

令和3年度における「改善に取り組む課題及び改善に向けた方策」について

番号	委員会・学科	今後、改善に取り組む課題	令和3年度に行う改善に向けた方策<Plan(計画)>	令和3年度における改善に向けた方策に対する評価等		
				令和3年度の実行内容(結果)<Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等)<Check(評価)>	改善に向けた方策(案)<Act(改善)> 〔または翌年度へ引き継ぐべき課題〕
1	教務委員会	遠隔授業を円滑に実施できる体制の整備を継続するとともに、ポストコロナ(ウィズコロナ)時代における遠隔授業のあり方について検討することが必要である。	新型コロナウイルスの感染状況等により対面授業の実施が難しくなった場合でも円滑に遠隔授業を実施できるよう体制整備を進めるとともに、ICT利活用教育検討ワーキンググループ及び教務委員会における議論を通じて遠隔授業のあり方や効果的な遠隔授業の実施方法等について検討する。	新型コロナウイルスの感染拡大等に伴い、授業の一部を遠隔授業実施期間とした。また、ICT利活用教育検討WGを通じて、教育効果の実証を目的とした遠隔授業の試行を行った。	県内外で急速に新型コロナウイルスの感染が拡大した際も、遠隔授業に移行することにより、学生に学修機会を提供できた。また、教育効果の実証を目的とした遠隔授業の試行で得られた知見をFD研修会で教員に共有できた。	今後も遠隔授業を円滑に実施できる体制を確保するとともに、試行により得られた知見を活用していく。
2	教務委員会	学生の要望・意見等を柔軟かつ効率的に把握することが必要である。	昨年度までに、WebClassを利用した授業アンケートやFormsを利用した学生生活実態調査を実施したところであるが、それらの実施結果を踏まえて、回答率の向上などに取り組んでいく。	授業アンケートについては昨年度に続きWebclass等により実施した。(学生生活実態調査は隔年実施のため本年度は実施せず。)	授業アンケートは、WebClass等の活用により、回答用紙の提出が不要となり学生の負担が軽減されるなど、効率化が図られた。	引き続きWebClassやForms等を活用し、より多くの学生の声を効率的に収集する。
3	教務委員会	データサイエンス教育検討委員会で協議されるデータサイエンス教育の理念やそれを実現するカリキュラム等について、教務委員会として検討する必要がある。	データサイエンス教育検討委員会と連携をとりながら、本学におけるデータサイエンス教育のあり方やカリキュラムについて検討する。	データサイエンス(以下「DS」という。)教育検討委員会において、全学共通の基礎科目の導入等について検討を行った。また、DS教育など、新たな教育内容の導入に伴い、今年度、カリキュラム検討会を組織し、本学のカリキュラムの見直しについて検討を行った。	令和3年度中に、全学共通のDS基礎科目を導入することなどを含む、全学的なカリキュラムの見直しの方針を策定することができた。	DS教育については、引き続きデータサイエンス教育検討委員会において、専門科目も含めた教育内容等について検討を行っていく。また、本学のカリキュラムについては、今年度に策定した方針に基づき、教務委員会において、より具体的な見直しを行っていく。
4	学生委員会	学生数の増加、学生気質の多様性などを背景に、学生の生活支援に対する教員の共通認識と意識の向上が必要である。	学生の生活支援の充実に努めるとともに、研修会等による教員の意識の向上を図る。	新規採用教員向け初任者研修会(対象14名)、FD研修会(参加135名)においてキャンパスハラスメントと学生相談について現状と取り組みなどに触れ、教員の意識の向上を図った。	FD研修会のアンケートでは教員の関心の高さがうかがえた。さらに、発達障害等への支援体制を構築する必要がある。	発達障害等への支援体制の強化を本学R4年度計画として提案し、実践していく。
5	入試・学生募集委員会	志願者の増加に向けて大学の認知度向上を図る取組みを強化する必要がある一方、コロナ禍における学生募集活動について検討する必要がある。	対面(訪問)方式の学生募集活動ができない場合を含めて、Web(オンライン)方式の学生募集活動の活用・充実を図る。	・対面型のオープンキャンパスや学生募集参加による高校訪問活動に加え、Webを活用したオープンキャンパスの実施や、受験情報誌やWebサイト等の各種媒体を活用した広告の掲載、大学紹介映像の配信等を行うなど、学生募集活動の充実・強化に取り組んだ。	Web方式の活用により、コロナ禍における感染防止対策に寄与できたほか、これまでアプローチが難しかった遠方の受験生や、日程の都合等で参加を諦めた受験生との接触機会の創出が可能となった。	感染拡大防止に引き続き取り組みつつ、活用する媒体やイベントの実施時期等を見直ししながら、より効果的な学生募集活動の実施により、より多くの志願者の確保、優秀な学生の確保に取り組む。
6	図書館運営委員会	本学学生への読書啓発活動を継続的に進め、図書館利用者数の増加を図る。	・学外から利用できる電子書籍も含め、読書啓発コーナーの充実に努める。 ・優秀読者表彰を推進し、学生の読書をさらに奨励する。	・昨年度からスタートした学生選書企画による図書購入を行った。 ・二年前から始めた優秀読者表彰(ベストリーダー賞:二部門)を今年度も行った。	・学生選書企画の応募に、一般書以外に学習参考書も加え、学生の図書館利用への関心を促した。 ・新型コロナウイルスの影響による図書館の利用制限などにより、昨年度よりは改善されたものの図書館入館者数や書籍の貸し出し数などが大きく減少した。	・学外から利用できる電子書籍などの充実をはかる。
7	図書館運営委員会	射水館HPおよび富山館HPの整備作業を引き続き進め、本館活動の学内外への情報発信に努める。	掲載内容の確認および更新を継続し、利用者の利便を図るようにする。	・図書館HPの全面改定を行った(外部委託)。	・全面改定したHPにより、学内外からの利用への利便性が大きく向上した。加えて、管理運営側からの操作性に優れたHPプラットフォームの変更により、開館時間の急な変更への対応などにも対応しやすくなった。	・利用者にとってにより使いやすくなるように、改定したHPのマイナーチェンジを行う。
8	地域連携セ	知的財産の活用推進を図る。	一部の発明について、TLO(技術移転機関)への発明評価や技術移転業務委託を試行的に行い、産学官連携コーディネーターと連携し知的財産の活用を努める。	TLOと技術移転業務委託契約を1件締結した。また、本学が保有している特許の情報を大学ホームページ等で公開した。	TLOへの発明評価の案件がなく、また、技術移転業務委託が1件にとどまり、効果の検証が行えなかった。	TLOへの業務委託を継続し、産学官連携コーディネーターと連携し、企業等へライセンス可能な知的財産を探索する。また、TLOの活用を定期的に学内周知する。
9	キャリアセ	・新型コロナウイルス感染防止に努めながら、学生や企業のニーズにも対応できる効果的な授業や就職支援事業の実施方法を検討する。	・新型コロナウイルス対策をとりつつ、以下を実施する。 ①学生の関心を高めるため、シルモクの参加企業に対し本学OB・OGによるプレゼン等を要請する。 ②学生がより多くの県内企業に関心を持つように、インターンシップ受入企業説明会の参加企業数を拡大する。 ③キャリアセンターサテライトを整備し、学生が県内医療機関等への関心を持つように実施事業を検討する。	①については、複数の企業において、本学OB・OGの参加があった。 ②については、オンラインで実施し、参加企業数は47社であった(従来は40社程度)。 ③については、次の3項目を実施(1)常駐職員を雇用し、適宜、学生への就職支援を行った。(2)医療機関の採用募集情報やキャリア形成に関する書籍等を整理・配架した。(3)感染対策措置を講じながら、各種キャリア支援セミナーや県内医療機関等説明会を実施した。	①については、OB・OGの話聞くことにより、学生が働くことについて身近に感じる機会となった。 ②については、参加企業数を拡大しただけでなく、説明会終了後も録画視聴可能としたことにより、学生が様々な県内企業のインターンシップを吟味することができた。 ③については、セミナー後のアンケート調査では、参加者の7割以上が実施内容について「良かった」と評価した。また、進学希望者を対象とするセミナー等の実施や、大学院及び専攻科情報の充実を望む意見があった。	・引き続き、新型コロナウイルス感染防止に努めながら、以下を検討する。 ①学生や企業のニーズにも対応できる効果的な授業や就職支援事業の実施方法 ②学生のニーズを踏まえながら、県内医療機関等や県立大学院・専攻科への関心を高める事業の実施方法。

番号	委員会・学科	今後、改善に取り組む課題	令和3年度に行う改善に向けた方策 <Plan(計画)>	令和3年度における改善に向けた方策に対する評価等		
				令和3年度の取組内容(結果) <Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等) <Check(評価)>	改善に向けた方策(案) 〔または翌年度へ引き継ぐべき課題〕 <Act(改善)>
10	計算機セ	Office365がサブスクリプション形式であるため、アップデート等の定期的な機能変更により、学内の業務に影響が及び、緊急の対応を求められる場合があるが、運用検討体制が定まっていない。	Office365の定期的なアップデートに関する情報収集体制を整え、運用を検討するために他組織(ICT利活用WG)との連携体制を確立する。	Microsoft 365 Message centerからのWeekly digestの配信をセンター兼務教員が受けるようにした。また、ICT利活用ワーキンググループに対しては随時情報提供を行った。	Teamsの講義録画方式等についてのマイクロソフト側の設定変更予定情報等を、計算機センター内部の会議で速やかに情報共有できるようになった。	情報ソースが英語での技術的なメールであるため、英語とマイクロソフト関係の情報技術との両方に対応できる体制が必要となっている。また、他組織との継続的な連携体制の確立については、今後の課題である。
11	計算機セ	登校不能な状態で学内計算機環境を利用するためには、利用者が自身の計算機上でここにサービスを導入する必要があり、容易ではない。	専門的な知識がなくても構成員が学外から学内の計算機環境を利用できるように、R2年度に他機関でセキュリティ事案が発生していることを参考に、安全性と利便性を備えたVPNサービスの導入を検討する。	VPNシステムの導入の手続きを進め、本年度末にシステムが稼働する予定となった。	フィッシングのような攻撃に対して一定程度の耐性がある2段階認証を導入することにより、これまで、セキュリティ侵害の恐れから学外に公開していなかった学内サービスに教職員が自宅からアクセスできる仕組みを構築した。	ユーザーの高いセキュリティ意識の確保、また、システム導入後の利用状況の継続的な把握と、持続的な運用体制を確立する必要がある。
12	計算機セ	セキュリティポリシーでは、情報セキュリティ最高責任者が必要と判断する場合に、セキュリティ監査を行うこととされているが、セキュリティ監査の学内実施実績が無く、セキュリティポリシーや対策基準の順守状況を能動的に把握する体制が無い。	他機関の監査実績を参考としつつ、学内でセキュリティ監査が実施できる体制を整え、またその現実的な実施方法を確立する。	情報セキュリティ監査の実施方法を確立するため、情報セキュリティ対策委員会に提案する監査手順の検討を行った。 (R4.3.2 情報セキュリティ対策委員会にて原案のとおり承認)	「情報セキュリティ監査手順」の策定により、自己点検表の活用等、R4年度の監査実施に向け準備が整えられた。	R4年度の監査実施後に情報セキュリティ対策委員会と連携し、次回に向けた課題整理を行う必要がある。
13	計算機セ	教職員から提出を求めている自己点検表の結果に対して、未実施と回答があった項目のフォローアップを十分に行っていない。	HPへの掲載に留まっている自己点検表の結果について、学内へのメール通知と合わせて委員会等でも周知し、各部局へ改善を求める活動の検討を行う。	自己点検表のテキスト見直しや、Formsでの回答収集により、提出率を高めた。自己点検表の結果は学内へメールで周知とともに、運営委員に改善に向けた働きかけを依頼した。 (R4.3.10 計算機センター運営委員会に併せて実施)	自己点検表の見直しを行い、USBメモリの取り扱い、教職員の情報セキュリティ対策の対応状況をより把握できるものとした。回収率は昨年度の同時期(12月)に比べて全体で48.9%から63%(約3割増し)向上した。	工学部の各学科並びに看護学部等からの計算機センター運営委員を通じて自己点検表の結果を、各部局に周知、説明する分担・協働体制を継続する。
14	計算機セ	パスワードについて、桁数や更新期間などについて指針を明示されておらず、パスワード漏洩に対するデータ盗難や改ざん等のリスクがある。	学内の利用状況等を分析によって、パスワード含む認証方式の管理指針を明確にし、セキュリティ研修会等にて、その指針の周知を行う場を設け、指針の浸透を計る。	学内各種システムにおけるパスワード作成指針を明確に定め、大学IDのパスワード更新時にそれらをチェックする仕組みを導入した。 また、パスワード作成指針を定める際に、最新のパスワード管理技術を調査し、過去推奨されていたが現在は推奨されない条件を見直した。 学内教職員向けのセキュリティ研修会において、上記指針およびパスワードを含む認証方式について周知した。	一部、パスワード作成指針を満たさない運用がされている学内システムが存在する。	学内各種システムが、定められたパスワード作成指針を満たすように運用されているか確認し、引き続きパスワードを含む認証方式についてセキュリティ研修会等において定期的に周知する。
15	生・医工研セ	それぞれの学科の枠を超えた共同研究などに加えて、くすりのシリコンバレーTOYAMAにおける研究活動などをさらに強化し、連動して学部教育も魅力的にする。	・「くすりのシリコンバレーTOYAMA」プロジェクトを、生物・医薬品工学研究センターが中心となって、学科の枠を超えた学内外共同研究として推進する。 ・産学官金によるマッチング・交流・ネットワークづくりを推進する。 ・国内外の共同研究を活発化し、連動する学部教育をより魅力的にしなが、生物・医薬品工学研究センターの研究活動をさらに充実させる。	センターに参加する各研究室がそれぞれ研究資金を得て、広範な共同研究などを展開した。 くすりのシリコンバレーTOYAMAの教育プログラムや研究において、以下の実績があった。 ・バイオ医薬品専門人材育成コース(生物・医薬品工学専攻大学院生対象) ・サマースクール<バイオ医薬品コース>(全国大学院生対象(学部生可)、および研修報告) ・生物・医薬品工学研究センターセミナー(バイオ医薬品公開講演会)3回開催(生物・医薬品工学専攻大学院生および両学科教員対象) ・実験ノートセミナー(2回開催)(生物・医薬品工学専攻大学院生および両学科学部生対象) ・4グループの研究、トップレベル人材の先生方との共同研究(各研究室) ・BioJapan2021に出展協力(1つのグループの研究を世界に紹介) ・富山県立大学サテライトラボでの共同研究(1件)	それぞれの学科の枠を超えた共同研究などに加えて、くすりのシリコンバレーTOYAMAにおける教育プログラムおよび研究が非常に活発に行われた。研究活動などをさらに強化し、連動して学部教育も魅力的にする。	学科の枠を超えた共同研究を広範に展開する。くすりのシリコンバレーTOYAMAプロジェクトでは自走に向けて取り組む。くすりの教育プログラムおよび大学院レベルでの活発な研究活動などを通して、学部教育もさらに魅力的にする。
16	パステル工房	ものづくりに対する学習効果の高い教育を実践するために、教育方法の工夫が必要である。	ものづくりの基礎的技術の習得や技能の向上を図るために、学生のものづくり教育の一環として行っている「チャレンジ the ものづくり」等を活用し、学生の学びの場を設ける。またパステル工房のホームページを整備し、実習映像の発信で学習効果をさらに高める。	研究に必要な治具、試験片等の作製を積極的に支援した。	全学的にパステル工房を利用してもらえるように、設置機器の紹介等を積極的に進める必要がある。	引き続き、ものづくりの基礎的技術の習得や技能の向上を図るため、パステル工房を活用した学生のものづくりを支援する。
17	パステル工房	事故時対応が不十分になる恐れがあるため、専任職員の雇用が必要である。	専任職員雇用に対する予算措置を引き続き求める。	専任職員の常駐は実現できなかった。	事故対応の体制を整備して、専任職員がいなくてもできるだけ安全確保できるようにした。	教育・安全の観点から専任職員の常駐が望ましく、予算措置を引き続き求める。

番号	委員会・学科	今後、改善に取り組む課題	令和3年度に行う改善に向けた方策<Plan(計画)>	令和3年度における改善に向けた方策に対する評価等		
				令和3年度の取組内容(結果)<Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等)<Check(評価)>	改善に向けた方策(案) 〔または翌年度へ引き継ぐべき課題〕<Act(改善)>
18	パステル工房	老朽化している工作機械はメーカーの補修対応期間が迫っており、早期の入れ替えが必要である。また、経年劣化による消耗品の交換も必要である。	入れ替えの必要な工作機械について優先順位をつけて予算要求を進める。	購入年月からの経過やメーカーの補修対応期間に応じて工作機械の入れ替えの優先順位を付けた。	鑄型成型機を新しく導入することで、学生等の使用者が安全に作業することが可能になった。	引き続き、入れ替えの必要な工作機械について優先順位をつけて予算要求を行う。
19	パステル工房	新規設備を近年多く導入し、パステル工房内レイアウトが変わっているため、安全管理・保安が十分か確認が必要である。	安全パトロールを適宜実施する等し、危険箇所をリストアップする。	適宜、安全パトロールを実施した。	安全に作業のできる環境を整備した。	引き続き、安全パトロールを実施し、危険箇所の洗い出しを行う。
20	パステル工房	学生のものづくり教育の一環として行っている「チャレンジ the ものづくり」を効果的に実施するため、参加者数を増加させる必要がある。	学生が興味を持つ内容を拡充する。全学的に学生が参加してくれるよう、教養ゼミ等でパステル工房の見学会を実施し、参加申込みを早期から行う。各種ゼミでの実施についても検討する。パステル工房のホームページも積極的に活用する。	9/20～9/30の期間で準備をしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大による、県の警戒レベル「ステージ3」の発令中を鑑み、開催を中止した。	風鈴、リングピロー、写真立て、小物入れといった身近なものを学生自身が作製する内容にし、興味を惹く募集案内を作成した。	引き続き、「チャレンジthe ものづくり」を実施する。早期にアナウンスを行って、多くの学生に参加してもらえるようにする。
21	教養教育	平成31年度4月(5月から令和元年度)に看護学部が開設され、令和2年度をもって、教養科目(外国語)の一部を除き、教養科目は完成年を迎えた。引き続き、看護学部における教養教育を確実に実施する方策を検討する。	・工学部総合科目および看護学部教養科目(人間の理解)の選択科目のクラス分け作業の効率化を検討する。 ・各科目または科目群で、履修状況等の問題が生じていないか点検を行う。	令和2年度末の成績認定時に判明した教養科目の単位不足者に対し、教務委員が中心となってその発生原因を調査し、提言をまとめた。	単位不足者の発生を放置せず、再発防止のために、状況を精査、対策を行った。	今後も、引き続き、看護学部における教養教育を確実に実施する方策を検討する。
22	教養教育	入試制度や学習指導要領(高校・中学)の変更に合わせ、教養科目の内容について検討を始める必要がある。	今後予定されている入試制度や学習指導要領(一部科目については既に調査を実施済)の変更内容の調査を行い、本学の教育への影響を分析する。	入試、および入学後の教育に対して特に影響が大きい数学を中心に、2022年度より始まる新学習指導要領の内容を調査・検討した。	入学後の基礎教育に対し影響が大きいベクトルを扱う数学Cについて、各高校での履修状況を知る事が重要である。	教養教育センターにおける基礎教育を円滑に進めるために、引き続き調査、検討を進める必要がある。
23	機械システム	中長期的な学科のあり方について検討を続ける必要がある。	25年検討委員会を中心として、中長期的なあり方について議論を進める。学科としてのDXおよびDSとの関わりについて議論を深める。	DX研究教育について検討し、今後必要となる設備を選定してDX教育研究センターへの導入を進めた。DS基礎教育の位置づけについて議論した。	県内企業のDX化促進の期待できる共通設備を整備した。(3月末までに設置予定。)	カリキュラム改訂に向けて、具体的な工程を決定する必要がある。
24	機械システム	ブレ配属制度(H30年度入学生以降)を円滑に実施する必要がある。	3年後期での取組み時間・活動量などについて、議論を進める。	ブレ配属を実施した。	新型コロナ感染症対策のため、配属決定が遅れたことや遠隔実施を余儀なくされるなど、当初計画通りには活動できなかった。	問題点や課題点などを抽出する作業を実施する必要がある。
25	機械システム	学部及び大学院のカリキュラム改定に向けた検討を継続する必要がある。	大学院での新たなカリキュラムでの教育効果や受講状況などを調査する。学科で必要なDS教育について検討する。	大学院での新たなカリキュラムをスタートした。DS基礎教育の必要性や実施方法について検討した。	大学院の科目数を削減したこと、開講科目当たりの受講生が増加し、グループワークなどの実施しやすい環境を構築できた。一方、従来とは受講生が変わったため、運営方法に戸惑う教員もいた。	複数の教員で担当することとなった大学院科目を効果的な運営する方法を議論し、共有する。カリキュラム改訂に向けて、具体的な工程を決定する必要がある。
26	機械システム	大学院進学者数が伸び悩んでいる。	大学院のメリット、実情などを、学部の早期の段階で周知する活動を継続する。	院修了生による講演を実施した。授業等を通じて、院進学のメリットを伝えた。	定員を超える志願者を獲得した。	院進学のメリットを継続して伝えていく。
27	機械システム	ICT技術を活用することで、教育効果の高い遠隔授業や、多様かつ効率的な働き方を可能にする仕組みを整備する必要がある。	Teams, メール, OneDrive, 学科NASなどの利用方法について整理し、効果的かつ効率的な運用について検討する。	学科会議, 学科FD研修, Teams 掲示板などを活用し、利用方法やノウハウの共有を進めた。	問題点や有効な利用方法を共有できた。	情報共有を継続する。
28	知能ロボット	これまで検討してきた新カリキュラム案において、学科の拡充を考慮した実験・実習の実現可能性について検討がされていない。	定員増加を考慮した実現可能な実験、実習の実施体制を検討する。	知能ロボット実験においてロボット用センサ・回路評価を行うためのLCRメータを導入した。またロボット創造演習にはロボットの部品試作に活用するための3Dプリンタを増設した。	LCRメータの導入によりロボットの必須要素であるセンサ・アナログ回路の基礎的評価を行う実験が可能となる。受講者が3Dプリンタを随時使用できる環境の構築により現場に則した研究開発の流れを体験させることが可能となり、ロボティクス分野を担う研究者・技術者の育成に有意義である。	学生数の増加、およびDXセンターに導入される設備の利用も見据えた実験テーマや演習課題、教材の更新を進める。
29	知能ロボット	受験生・保護者・高校教諭・在学生に対して、知能ロボット工学専攻で学べることを理解し、大学院での研究内容をイメージしやすい効果的な情報発信を行う必要がある。	学科・専攻のHPにおいて、具体的な研究対象と取り組みを紹介する情報が不足しているため、充実させる。	受験生・保護者・高校教諭・在学生が本学科の研究内容を具体的に理解できるよう内容を拡充した。	県内の著名なライターによるインタビュー記事を掲載し、一般にも分かりやすい言葉での情報発信に取り組んだ。	大学院生や修了生に関する情報発信を充実させ、研生活や修了後のキャリアを分かりやすく発信する。
30	電気電子	単位不足者が継続的に発生している	入試区分や講義科目との関連を含め、単位不足者の傾向を追究して解析し、対策立案に役立てる。また、これらの単位取得状況や、1年次においては専門科目の履修状況を考慮し、教務委員、学生実験委員会などを通じて、単位不足者との懇談を行う。	・学生委員と教務委員が主体となり、単位不足者に加え予備軍としての要注意学生の情報を集約し、学科内で情報共有に努めた。 ・入試区分ごとに、合格者の入試得点分布およびその年次推移について分析を開始するよう、学内入試担当部署に継続して要望した。	・講義担当者のケアによりR02年度入学者に占める単位不足者の割合は大きく低下した。 ・他方、R04年度からは工学部の定員増に伴い、成績不振者が大量に入学することが予想され、左に記した合格者の得点解析の必要性がさらに増大する。	・合格者の入試得点分布と年次推移の解析に早急に着手すべきである。

番号	委員会・学科	今後、改善に取り組む課題	令和3年度に行う改善に向けた方策<Plan(計画)>	令和3年度における改善に向けた方策に対する評価等		
				令和3年度の取組内容(結果)<Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等)<Check(評価)>	改善に向けた方策(案)<Act(改善)> 〔または翌年度へ引き継ぐべき課題〕
31	電気電子	大学院進学率が3割前後で停滞している	学部卒と大学院卒の就職先および就職内定時期の調査を行うなどして、院進学の特長を低学年から学生に周知する。	・院進学のメリットを年次別のオリエンテーション等の機会に強調した。	前期課程ではR3年度も定員が充足され、さらに後期課程の入試では3名の学生が合格した。	・大学院での研究に耐えられない学力の者も一定数いることから、院進学を勧奨する際の方針については再考する必要がある。
32	電気電子	大学院のカリキュラム改定を検討する。	大学院のカリキュラムを改定すること検討し、令和4年度からの実施を目指す。	・専攻の電子系・情報系各科目のバランスを考慮し、一部の科目を統合・閉講して整理した。	学生のニーズ及び専攻内の電子系と情報系の学生数のバランスに配慮した科目配置となった。	今後学部の分割と定員変化に伴い、進学者の人数及び電子・情報系の人数比が変化することが考えられる。これらにも臨機応変に対応していく。
33	情報システム	学科新設の趣旨に沿った教育プログラムを確立する必要があるが、実験科目の授業内容については未確定の部分があり、これを確定し、実験機器を調達する必要がある。	実験テーマの詳細を確定し、必要な実験機器を購入する。また、実験テーマを試行し、教育効果や受講者負担の妥当性を評価する。	実験テーマの詳細を決定し、必要な実験機器を調達した。また実験テーマを試行し、教育効果や受講者負担の点でも問題ないことを確認した。実験テーマの1部は本年度後期より授業として実施している。	優れた点:実験科目の授業内容を確定し、実験機器の調達も完了し、予定通り授業を進めている。 改善を要する点:定員拡充に対応する実験内容、実験機器の追加調達に関する検討が必要である。	令和4年度中に定員の増加に対する対応方針を確立する。
34	情報システム	令和4年4月に予定されている入学定員拡充に備え、授業方法の問題を明らかにし、対応方法を決定する。	講義・演習科目の複数クラス化の必要性や、実験科目におけるスペースの確保方法を検討する。	令和4年度に開講する講義・演習科目について、定員拡充への対応策として、複数クラス化の必要性について検討した。結果として多くの授業科目が1クラスで対応することとなった。	優れた点:令和4年度開講の講義・演習科目については、定員拡充時におけるクラス構成の方針を確定した。 改善を要する点:令和5年度以降に開講する科目、特に他学科と共同で開講している科目については定員拡充への対応を検討する必要がある。	令和4年度中に、令和5年度以降に開講する科目についても複数クラス化、他学科との共同開講の見直し等、定員拡充への対応を進める。
35	情報システム	中央棟の学科フロアの設備について、より有効利用する必要がある。	ラーニングコモンは学生によく利用されているが、より教育効果が高める教材、機器の設置等を考える。	電子黒板を利用して情報を提供するとともに、キャリア形成に有用な資料をラーニングコモンに配置した。	優れた点:電子黒板により新型コロナウイルス感染症に関する情報を随時周知し、大きな効果を挙げている。 改善を要する点:電子黒板についてはさらに活用を図る必要がある。	令和4年度前半までに電子黒板で学生に有用な新たな情報コンテンツを提供する。
36	環境・社会基盤	平成30年度入試より入試科目の変更、単願制に変更したことによる入学学生の学力等への影響を把握し、必要であれば対応を検討する。 〔平成30～令和3年度〕 複数年度課題	入試科目を変更した後の物理系科目における学生の成績状況を分析する。化学分野の研究室への希望状況の変化を把握する。	基礎物理学・基礎化学の履修状況を調査した結果、化学選択者の多くが基礎物理学を履修していた。物理系科目である構造力学等の成績を分析した結果、化学選択者の優劣に明確な傾向がみられなかった。化学選択者の多くが環境工学講座の研究室に配属されていた。	入試科目の変更、単願制への変更による効果は、想定通りであり、悪影響は見られなかった。化学選択者は基礎物理学で基礎学力の習得が図られている。(想定された効果:化学分野に興味のある学生の入学、第2志望のミスマッチによる退学者防止)	変更の効果は想定通りであり、悪影響は見られなかったため、さらなる対応は必要ないと判断する。
37	環境・社会基盤	実験・実習や現場見学会を実施する際に、新型コロナウイルス対策に適切に対応した方法を確立する必要がある、検討する。 〔令和3～4年度〕 複数年度課題	実験・実習の授業および現場見学会で新型コロナウイルス対策に対応した方法を計画する。実施した上で、内容の妥当性を確認する。	新型コロナウイルス対策に対応した方法の概略を計画し、新教育P開発に申請した。現場見学会や各種発表などの撮影動画をHPやSNSで共有すること、「レポートの書き方」マニュアルを改訂することを具体的に計画し、実施している。	現場見学会や座学への対応方法は計画し、実施している。 実験・実習の授業に関する対応方法を計画し、実施することが未達成である。	実験・実習の授業に関する対応方法を計画する。(R4年度:新教育P開発に申請予定) R3-4年度の実施した内容について、妥当性の確認をR4年度に実施する。
38	生物	H31年度入試における入学志願者が大幅に減少し、R2年度に若干回復したが、H30年度以前に比べて減少傾向にある。	H31年度の志願者倍率の激減(1.1倍)からR2年度は2.5倍に回復したが、H30年度(4.0倍)より減少傾向にあるため、その原因を分析すると共に、志願者数の増加に向けた対策を検討する。将来の入試形態(試験配点、県外推薦枠の増員など)の変更について検討を継続する。	前期入試試験配点の変更、県外推薦枠の増加、後期入試の廃止について検討してきたが、それらの変更に対する慎重論も多く、結論には至っていない。引き続き今後の動向を見ながら検討を継続する。	前期一般入試の倍率はR4年度は1.8倍となり、過去3年間の平均的倍率で推移した(R3:2.5倍、R2:1.1倍、H31:4.0倍)。医薬品工学科との併願が可能のため、本学科を第二志望として入学する学生数も多い。本学科の第一志望者増加は懸念の課題であるが、両学科合わせての倍率上昇も入学者全体の学力レベル向上につながるから重要である。二学科合わせての倍率は、R4年度2.9倍、R3年度3.4倍、R2年度2.1倍、H31年度4.5倍と比較的安定に推移している。	推薦面接では本学でのオープンキャンパスに影響を受けたであろう受験者が多く、またオープンキャンパスでは二年生の参加数が多かったことを鑑み、次年度以降のオープンキャンパスでの模擬講義等をさらに魅力的な内容にしていく必要がある。一方で、一般入試では県外受験者が多いことから、学科HPを充実させることにより遠方の受験生に魅力を伝える工夫が必要である。また入試形態の変更については検討を継続する。
39	生物	大学院進学者数を増やす。	昨年度も博士前期課程は定員割れ(26名に対して23名)となった。研究への関心を高めるため、学部低学年時からの研究室紹介、大学院進学の特長の説明などを実施する。後期課程については社会人・留学生も積極的に勧誘する。	本年度は博士前期課程に21名が合格し、大幅増となった。また博士後期課程には2名が合格し、前年度に引き続き、安定に推移した。	本年度の四年生に対しては、一年生の時点から折に触れて、院進学の意義や価値を伝えており、その成果が現れてきたものと評価している。	引き続き、下学年学生に対して、院進学を促すように、丁寧な説明を続けていく。また博士後期課程については、文部科学省の国費留学制度を活用するなど、学生の獲得に努める。

番号	委員会・学科	今後、改善に取り組む課題	令和3年度に行う改善に向けた方策 <Plan(計画)>	令和3年度における改善に向けた方策に対する評価等		
				令和3年度の実行内容(結果) <Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等) <Check(評価)>	改善に向けた方策(案) 〔または翌年度へ引き継ぐべき課題〕 <Act(改善)>
40	医薬品	令和2年度までに4年間のすべてのカリキュラムを終えており、カリキュラムの見直しに向けた検討を引き続き行う必要がある。	ワーキンググループを立ち上げ、カリキュラムの見直しについて検討を開始する。また、昨年度FDで実施できなかったゼミや学生実習の内容についても精査する。	学科教員5名からなるカリキュラム検討ワーキンググループ(WG)を立ち上げ、学科の学習・教育目標の達成状況を検討し、カリキュラム全体を見直した。また、学生の習熟度を確認し、講義内容を改善するため、各授業ごとと学年全体に関するアンケートをFormsを用いて実施した。さらに、学科FDにより学生実習の内容を精査した。	カリキュラムの見直しを検討する中で、履修の手引きの学科の教育理念および学習・教育目標を学科の現状に沿った内容に改定することができた。学科の全学年の学生に対し独自のアンケートを実施し、カリキュラムの見直しや授業の改善の参考にすることができた。一方で、回答率が低い授業や学年があったことから、回答率を上げる必要がある。学科FDを実施し全教員が学生実習の内容や相互の連携について理解し、今後の授業の参考にすることができた。	カリキュラムの見直しを継続して行うため、教務委員を中心としたカリキュラム検討WGの活動を続ける。学科独自のアンケートも継続して実施する必要があると考えており、今年度の実施結果を踏まえて回答率の向上に努める。
41	看護	大学院や専攻科の設置に向けて、教育目標・教育課程について検討する必要がある。 【令和2～3年度】 複数年度課題	【令和2年度】 大学院・専攻科の教育目標を達成する教育課程について検討する。 【令和3年度】 大学院・専攻科の設置申請に向けた書類等の準備を進める。	看護学部内に学科長を委員長とする開設準備委員会を設置し、本学大学院看護学研究科並びに看護学専攻科の設置申請に向け諸準備を進めた。学生確保の見通しを示す需要調査や他大学の事例調査を実施し、調査結果を添付した研究科設置認可申請書を提出(3/16)。養成学校指定申請書を5月下旬に提出予定。	人事や予算など開設準備委員会で決定しない事案について、委員会での報告の仕方等、円滑に行かなかった部分があった。 工学部(大学本部)との適時適切な報連相に努めた。	大学院・専攻科のPR、学生募集・受入などの体制整備を円滑に進め、令和5年4月の開講を目指す。
42	改革・評価委員会	今年度は、中期目標・中期計画の初年度であることから、その内容を広く周知する。 令和5年度までに実施しなければならぬ認証評価を受ける認証評価機関が決定されたことから、これに向けた準備を始める必要がある。	・中期目標・中期計画の周知を行い、これを踏まえたPDCAの取り組みが進められるよう働きかけていく。 ・次回の認証評価を受ける認証評価機関の受審内容について、情報収集を行う。	・中期計画や年度計画を添付のうえ、令和3年度における改善に取り組む課題等を考えて頂けるように取り組んだ。 ・事務局において、認証評価機関が開催した説明会(オンライン)に参加し、評価基準の内容について情報を収集した。	・認証評価機関が変更となったことで、新たな評価基準が追加となるが、これに対する理解が未だ手つかずの状況となっている。このため、改革・評価委員会委員を中心に内容への理解を深める必要がある。	・令和4年度は認証評価の自己評価を作成する年度となるため、評価基準等について、関係者の理解を深めつつ、作成作業を行う必要がある。

令和3年度の「改善に取り組む課題及び改善に向けた方策」に関する学長コメント
<p>令和3年度においても、新型コロナウイルス感染防止対策等への対応が求められるなか、各委員会、学科等において、着実な取り組みが行われ、評価できる。</p> <p>来年度は、令和5年度に受審する認証評価に必要な自己評価書を作成する年となることから、これまでのPDCAの取り組みを振り返りつつ、更なる教育水準の向上等へ向けて、着実な改革・改善に取り組んでいただきたい。</p>